木曽三川 歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2013 冬
Vol.85
平成25年

地域の歴史
飛騨川沿いの河岸段丘上に
発展してきた川辺町

地域の治水・利水施設
下麻生湊の繁栄と川辺ダム湖の周辺整備

歴史記録　輪中の水防意識　第一編
地域変容と水意識の格差（二）

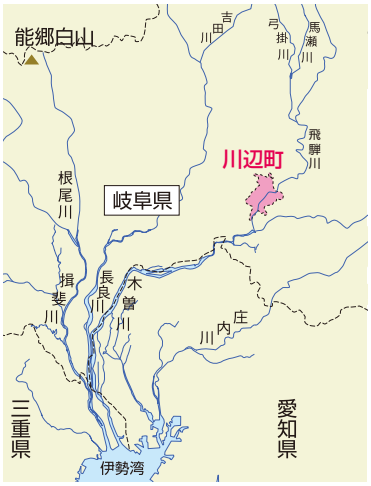
研究資料　服部一宏
木曽三川下流地域の牛頭天王信仰

地域の歴史

飛騨川沿いの河岸段丘上に発展してきた川辺町

岐阜県加茂郡川辺町は、大和朝廷の成立期よりその影響下にあった先進地域でした。江戸時代には飛騨川水運で栄え、現在は工業の進出と宅地化による都市化が進んでいる地域です。

古代から開発が進んでいた川辺町



天子の渡しの現況

岐阜県の中南部に位置する加茂郡川辺町は、濃尾平野の北端にあたり平野部と飛騨山地の接点です。西・南が美濃加茂市、北が七宗町、東が八百津町に接し、町の中央部を木曽川支流・飛騨川が北東から南西に流れ、その両岸の河岸段丘上の台地に耕地・宅地が集まっています。飛騨川に並行しJR高山本線と国道四一号が走っており、町内には高山本線の中川辺駅・下麻生駅があります。

飛騨川流域の集落群として、当町の上川辺・下川辺・比久見などに縄文遺跡が点在しています。しかし、遺跡の多くは十分な調査がなされないまま埋め戻され、縄文土器や磨製石斧などの出土品も多数が散逸し、所在不明となっています。弥生時代の遺跡も縄文遺跡の継承で、同一地域から土器などが出土していますが、これらの遺物も現在では多くが所在不明となっています。古墳も同一地区を中心に、小規模な円墳が一〇基ほど現存しています。飛騨川流域の古墳は川辺町が北限で、これより北では金山町・下呂市に数基が残っているだけです。

『日本書記』景行天皇の条に、弟媛の説話が載っています。景行天皇が美濃に行幸した際、稀に見る美人と評判の八坂入彦の次女・弟媛を后にしようと泳宮（現可児市）に止め置きますが、その心を動かすことが出来ず、替わりに長女を后として都に帰ったと言う話です。この行幸の事跡は川辺町に多く、上川辺には天子の渡しと呼ばれる渡し跡が残っています。また御座野という地名があり、この地に天皇が滞在されたと伝わっています。下麻生には天子の滝が現存し、天皇が身を清めたとされています。上川辺の阿夫志奈神社の境内に弟媛を祀った乙姫神社があり、弟媛は后になるのをきらい、この地に逃れてきたという伝承があります。景行天皇は実在しない伝説上の人物とされていますが、こうした事跡が多く残されている背景には、大和朝廷草創期よりこの辺りがその勢力下にあったことを示しています。

乙姫神社

川辺町

大和朝廷の行政区分である国郡里制では、美濃国には当初一四郡あったものが、その後一八郡となり郷の総数は一三一郷ありました。『和名類聚抄』によれば、当町域には壬部郷（比久見・下吉田・福島）は平城京跡出土の木簡に名があり、条里制の遺構が残っています。川辺郷は飛騨川右岸の西栃井・中川辺・石神付近と推定されます。駅家郷は延喜式に「加茂駅、馬四疋」とあり、飛騨

路の五駅のひとつとして下麻生にあったといわれています。

戦国時代の川辺町

鎌倉に幕府を開いた源頼朝は、有力な御家人を国ごとの守護に任命すると同時に、公領・荘園にも地頭として御家人を配しました。美濃国の守護については、大内惟義や梶原景時などが記録に残っていますが、全ての氏名は判明していません。川辺町付近の地頭の存在についても記録はありませんが、かなりの勢力を持っていた川辺荘・米田荘の二つの荘園には、地頭が任命されていたと思われます。

愛宕山（米田城址）

戦国時代の当地には、飛騨川左岸福島の愛宕山に肥田玄蕃が築いた米田城があり、玄蕃はこの城を拠点に美濃加茂市・八百津町に及ぶ広範囲を支配していました。一五八二（天正一〇）年六月、織田信長が本能寺で敢え無く最期をとげると、金山城主・森長可は本能寺で討ち死にした蘭丸ら三人の葬儀と称して行列を進め、途中から軍装に変じて兼山湊で木曽川を渡り、米田城を攻めました。米田合戦と呼ばれたこの戦いで肥田勢は敗走し、森長可は可児郡・加茂郡を支配下に収め、翌年には土岐郡に進出して東濃一帯に勢力を伸ばしました。その後、長可は小牧長久手の戦いで秀吉方として参戦し戦死、家督を継いだ忠政は、徳川家康に従い、一六〇〇（慶長五）年に信濃四郡に移封されました。

江戸時代の村々と能古山騒動

江戸時代の当町域は、幕府直轄領、尾張藩領、旗本・大島氏領に分割統治されていました。江戸時代を通して領主変更がありましたが、幕末時点では鹿塩村・下川辺村・西栃井村・石神村・上川辺村が幕府直轄領、下麻生村・下吉田村・比久見村・福島村・下飯田村が尾張藩領、中之番村・東栃井村が大島氏領となっています。幕府直轄領の下川辺村には笠松代官下川辺役所があり、加茂・武儀・郡上の三郡の幕府直轄領を統括していました。川辺町と七宗町の境界にそびえる能古山は、周辺の下川辺・西栃井・中之番・石神・上川辺・鹿塩の六ヶ村が共用する入会地で、肥料や飼料となる下草、燃料となる原木などを採取する、農民にとって重要な山でした。長い年月の間に不明確になった村々の境界をめぐって、一七〇七（宝永四）年から一八八〇（明治一三）年まで、一七三年間にわたって争論が繰り返されました。能古山山論と呼ばれるこの争論は、上川辺村が下川辺・西栃井・中之番・石神の四ヶ村を相手に幕府評定所に訴え出たことに始まり、追って鹿塩村も前記四ヶ村を相手に提訴しました。幕府評定所では審議を経てなお結論が得られず、役人による実地検分が行なわれ、一七〇八（宝永五）年に上川辺村の非を指摘した裁定が下されました。しかし、山の境界や運用についての争論は、当事者が変わりながら延々と続き、明治になっても絶えず、一八八〇年の大審院判決によってようやく終止符が打たれました。

能古山入会論争顕彰碑

都市化が進む川辺町

江戸時代の村々は合併・分離を重ねて、一九五六（昭和三一）年当時の川辺町が下麻生町の下麻生地区を編入して現在の町域が確立しました。

美濃と飛騨路を結ぶ交通の要所であり、飛騨川水運の拠点として栄えてきた当地でしたが、明治以降は水運が衰退する中、一九二二（大正一一）年国鉄高山線が下麻生駅まで開通し、中川辺・下麻生駅周辺が賑わうようになりました。これと並行する国道四一号線は一九五九（昭和三四）年から改良工事が着手され、名古屋―富山間を結ぶ幹線道路として沿線地域の発展に寄与してきました。さらに二〇〇五年に東海環状自動車道が部分開通したことで、愛知県からのアクセスが一段と向上し、工場の進出・住宅地の増加など都市化が進んでいます。

東海環状自動車道

■参考文献

『川辺町史　通史編』川辺町　平成八年
『岐阜県の地名』平成元年　平凡社
『日本地名大辞典・岐阜県』昭和五五年　角川書店

下麻生湊の繁栄と川辺ダム湖の周辺整備

飛騨の山林から刈り出された良質の木材は、飛騨川を流送され、川辺町域の下麻生綱場で筏に組まれ、さらに下流へと送られていました。現在の川辺町は、川辺ダム湖周辺を美しく整備し、観光資源として町の活性化を図っています。

飛騨川
（川辺大橋より上流を望む）

飛騨の山林経営

飛騨は面積の九〇％が山地で占められ、原生林が茂る広大な山林は良質な木材の産地でした。古くは室町幕府も用材を飛騨に求めており、同時代の伊勢神宮の造営にも飛騨木材が使われていました。

初めて飛騨の山林資源を本格的に管理し経営したのは、戦国武将・金森長近でした。長近は織田家に使え、信長の天下統一の過程で軍功をあげ、豊臣秀吉から飛騨一国を与えられました。関ヶ原の戦いでは徳川家康方につき領地を安堵されました。長近は国内の山林を、領主が直接支配する地頭山、農民が下草・薪材を採取できる百姓稼山、家を作るのに使う木材を得る家作木願場の三つに区分して管理しました。また、かなりの資金を投じて山林の育成にも取り組みました。

豊富な山林資源に着目した幕府は、飛騨を幕府直轄地にするため、一六九二（元禄五）年に金森氏の転封を実施しました。以後、飛騨国は一円幕府領として、高山陣屋で治政が執られました。

飛騨木材の流送

飛騨木材の運搬は専ら飛騨川での流送によって行なわれ、雨季を過ぎた九月から翌年三月までが流送の期間でした。その工程は、山中で刈り出された木材を渡し場まで運ぶ山出し、渡し場に集めたものを谷川へ入れる渡入れ、谷川から大川に流す谷出し、大川に浮かべて流す川下しと呼ばれました。川下げ木材は、太い藤綱を張り渡した綱場で筏に組まれました。飛騨川には木材を改める下原中綱場（下呂市）と筏に組む下麻生綱場があり、郡上・苗木藩の材木も下麻生綱場で筏に組まれました。

昔の下麻生綱場の様子（出典：ふる里写真誌「下麻生」）

筏は木材を縦横に使用して藤蔓で堅固に組みあげられ、普通の筏は二間（三・六メートル）の材五〇本によって組まれました。下麻生綱場で組まれた筏は、二人の乗り手によって木曽川に合流して犬山に至り、ここで筏二枚を繋いで一人乗りで円城寺（笠松町）まで下りました。円城寺で三～四〇乗の筏材団を構成して、数人が乗り込み、船中で寝起きして桑名や熱田白鳥まで運びました。

下麻生湊の繁栄

下麻生湊は、飛騨川右岸・現在の飛騨川橋より下流の少し広くなっている所にあり、橋の上流側に綱場がありました。飛騨川で最も繁栄した湊で、木材以外にも薪炭を主とした貨物や旅人の運送などの起点となっており、伊勢参詣に行く人も多くがこの湊に集まってきました。この小さな河岸の村が、一七五六（宝暦六）年時点で戸数三三二戸・人口一二〇二人を有し、旅館・問屋・商家が立ち並び、筏師や綱場人夫などの賃金生活者も多く定住していました。

現在の下麻生湊の様子

川辺ダム

下麻生村には、尾張藩の川並役所が置かれ、川役銀（えきぎん）の徴税にあたりました。川役銀は、飛騨川の利権を持つ尾張藩が、通関税として取り立てたものです。初めは材木六本につき一本を召し上げて、これを商人に売り払い、綱場の補修や筏人足の経費を差し引いた上で上納されていました。その後、木材の上納は代銀に改められて、いわゆる「六分一役銀」となりました。

飛騨川運材の拠点として繁栄した下麻生湊も、流材の減少とともに衰退していきますが、明治以降も川湊としての役割を担っていました。

川辺発電所の建設

飛騨川の電源開発は、大正初期に小規模な発電装置を、細い渓流などで用いたのが始まりです。その後、大正後期から昭和初期にかけて、電力会社による本川での本格的な開発が行なわれるようになりました。大正後期には、金山・七宗・名倉・上麻生などの地点に発電所を設ける計画が立案されました。下麻生地点も計画の対象になりましたが、落差が少ない上、両岸が険しく建設に多額の費用を要することから立ち消えになりました。こうした経緯があって、一九三五（昭和一〇）年に川辺地点での建設が決まりました。前年から測量調査が進められ、一九三六（昭和一一）年二月着工、翌年一二月に運転を開始しました。

川辺発電所は、飛騨川下流の平坦地に位置しており、両岸に沿って耕地が開け、河床は深く洗掘され、河岸からの深さは二〇メートル以上になっていました。発電はこの洗掘深を利用し、さらにダムによって水位を上昇させ、右岸に設けた取水口から水路で水槽に導き、鉄管で水車に導水します。

川辺発電所のダムには、特徴的な機能が設けられています。ダム湖に流送された木材の筏を下流に流す流筏路（りゅうばつろ）が、ダムの右端から河岸に沿って放水口終端に達しています。流入口には鋼製門扉が設置され、ダム構内で降下させるようにして流量を調節、筏の流下を容易にしていました。しかしこの流筏路は、国鉄高山線の開通によって筏が減少して利用されることはなくなりました。また舟の通行には、舟体を載せて昇降する舟運台を設けて、上り下りする舟を通していました。この舟運設備も今日では全く使われなくなっています。

ダム湖周辺の整備

白川町から川辺町にかけての飛騨川は、飛水峡（ひすいきょう）と呼ばれ、岩と清流が織りなす美しい自然が続いています。川辺ダム湖は、飛水峡の下流端にあたり、流域面積二，一五九平方キロメートルの広大な湖は景観が美しく飛水湖と呼ばれています。

一九七〇（昭和四五）年に、一年を通して川の流れや波風がほとんど立たない絶好の条件を活かして、岐阜県川辺漕艇場が開場され、現在は国内有数のボート競技のコースとして、大会や練習に多くの競技者が利用しています。二〇一二（平成二四）年一〇月には、ぎふ清流国体のボート競技会場として使われました。

ぎふ清流国体でのボート競技（提供：岐阜県川辺町）

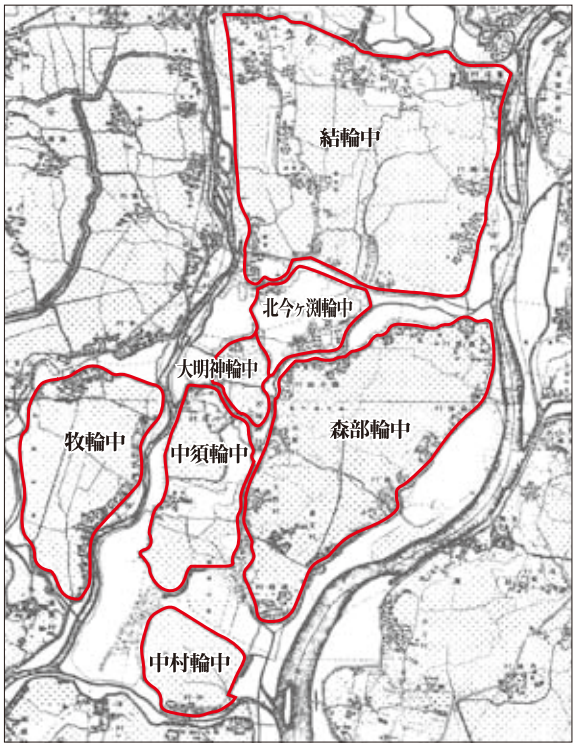
川辺町では川辺ダム湖を町のシンボルとして「ボート王国かわべ」のキャッチフレーズのもと一九八九（平成元）年より川辺ダム湖周辺の整備をすすめ、一九九三（平成五）年には湖岸線道路・遊歩道や広場の整備を完了しました。美しく整備されたダム湖周辺は、観光資源として町の活性化を担っています。

ダム湖の周辺整備（かわべ夢公園）

■参考文献
『川辺町史　通史編』川辺町　平成八年
『岐阜県の地名』平成元年　平凡社
『日本地名大辞典・岐阜県』昭和五五年　角川書店

輪中の水防意識 第一編

地域変容と水意識の格差（二）



図(1)　安八町の輪中分布図　明治24年仮製地形図 1:20,000(伊藤安男)

第八三号でふれた九・一二豪雨（九・一二輪中水害）の安八町と輪之内町の明暗は、輪中地域の人々に大きな影響をあたえた。それは輪中堤が二段構えの控堤として極めて有効であること、さらにそれを支える地先水防の重要性を、輪中堤を取り壊した住民たちに強く認識させたことであった。（図(1)（2）参照）

輪中民にとって生命線というべき伝統的な輪中堤を無用として取り壊した背景には、都市化による景観変化が深く係わっている。アンケート調査、産業構造、人口動態から両町の明暗を見てみよう。

四．人口動態から見た格差

一九六三（昭和三八）年に揖斐川に大垣大橋、長良川に羽島大橋が架橋されて大垣・一宮線が本町中央部を横断、さらに翌年の一九六四（昭和三九）年に東海道新幹線開通に伴う岐阜羽島駅の設置など、交通体系の変遷により多くの工場が進出してきた。

これらを年代順に列記すると、一九六八（昭和四三）年にグリコ協同乳業株式会社（現：グリコ乳業株式会社）、翌年にはこの地域最大の敷地面積三三〇，〇〇〇㎡の三洋電機株式会社岐阜工場、次いで一九七一（昭和四六）年に淀川製薬株式会社岐阜工場（現：住友化学株式会社）、一九七二（昭和四七）年に帝人岐阜工場（現：帝人デュポンフィルム株式会社）などが進出した。

図(2)　9.12水害時の洪水波の浸水状況(国立防災技術センター資料)

しかし、これら工場群の立地環境は、土地条件からみると極めて劣悪である。三洋電機株式会社岐阜工場は地盤高が最低の土地であり、地耐力の弱い後背湿地（Back Marsh）のため液状化が予測される地形である。

都市化による農地の宅地転用率は一九六〇（昭和三五）年から一九七〇（同四五）年の一〇年間に五倍、工場用地転用率は三倍となった。

それに伴い、人口動態も大きく動いた（表(1)（2）参照）。一九六〇（昭和三五）年までは両町ともに八，〇八一人（輪之内町）と九，三四七人（安八町）と大差なく、しかも人口減という過疎化傾向を示している。一九六五（昭和四〇）年には安八町は増加傾向を表し、その伸び率は三．八％と上向いているのに、輪之内町はなお過疎化が続いている。一九七〇（昭和四五）年には安八町は大きく増加して伸び率二七．三％となるが、輪之内町はマイナ

伊藤 安男 氏

1929年生まれ
1952年立命館大学文学部地理学科卒
岐阜県高等学校地理教師、岐阜経済大学講師を歴任
1982年花園大学部文学部史学科教授
現在、花園大学名誉教授。　文学博士

・主な著書
『治水思想の風土』(1994年)
『変容する輪中』(1996年)
『木曽三川』(2007年)
『台風と高潮災害 伊勢湾台風』(2009年)
『洪水と人間』(2010年)　など。

■輪之内、安八両町の男女別人口推移［表(1)］

区分／市町名	昭和35年 男	女	計	昭30比増減人口	伸び率(%)	性比
輪之内町	3,928	4,153	8,081	△431	△5.1	95
安八町	4,610	4,737	9,347	△359	△3.7	97

区分／市町名	昭和40年 男	女	計	昭35比増減人口	伸び率(%)	性比
輪之内町	3,688	4,022	7,710	△371	△4.6	92
安八町	4,781	4,921	9,702	355	3.8	97

区分／市町名	昭和45年 男	女	計	昭40比増減人口	伸び率(%)	性比
輪之内町	3,630	3,839	7,469	△241	△3.1	95
安八町	5,444	6,910	12,354	2,652	27.3	79

※性比＝男／女×100（単位：人）　△は減少を表す　（国勢調査より）

■輪之内、安八両町の年次別人口動態の推移［表(2)］

区分／年次		昭和35	昭和36	昭和37	昭和38	昭和39	昭和40	昭和41	昭和42	昭和43	昭和44	昭和45
輪之内町	10月1日現在 (A)	8,081	7,932	8,206	8,076	7,861	7,710	7,607	7,550	7,572	7,489	7,469
	自然増減数 (B)	19	61	24	53	37	37	△3	41	94	50	30
	社会増減数 (C)	△148	△210	250	△183	△252	△188	△100	△98	△72	△133	△50
	(B)＋(C) (D)	△129	△149	274	△130	△215	△151	△103	△57	22	△83	△20
	(D)／(A)×100 (%)	△1.60	△1.88	3.34	△1.61	△2.74	△1.96	△1.35	△0.75	0.29	△1.11	△0.27
安八町	10月1日現在 (A)	9,347	9,290	9,401	9,613	9,593	9,702	9,784	9,893	9,935	10,743	12,354
	自然増減数 (B)	89	90	89	52	81	98	31	102	97	109	144
	社会増減数 (C)	△141	△147	22	160	△101	11	51	7	△55	699	1,467
	(B)＋(C) (D)	△52	△57	111	212	△20	109	82	109	42	808	1,611
	(D)／(A)×100 (%)	△0.56	△0.61	1.18	2.21	△0.21	1.12	0.84	1.10	0.42	7.52	13.04

（基準人口は35・40・45年国勢調査、自然増減および社会増減人口は関係各市町村住民基本台帳人口より）

■輪之内、安八両町の生産所得の推移［表(3)］　単位：百万円

年次		第一次産業 農業	林業	水産業	小計	第二次産業 鉱業	建設業	製造業	小計	第三次産業 卸小売	不動産・金融保険	運輸通信	水道・電気・ガス	サービス	公務	小計	計
輪之内町	昭40	392	—	1	393	3	100	22	125	37	39	14	3	75	56	224	742
	41	499	—	1	500	2	133	22	157	37	39	18	2	86	58	240	897
	42	618	—	1	619	26	122	39	187	39	42	16	2	98	51	248	1,054
	43	761	—	2	763	24	100	74	198	82	134	22	4	133	74	449	1,410
	44	830	—	1	831	23	148	61	232	124	144	57	8	212	76	621	1,684
安八町	昭40	340	—	—	340	18	88	213	319	53	43	23	1	97	25	242	901
	41	365	—	—	365	12	77	202	291	61	49	24	1	127	28	290	946
	42	443	—	—	443	13	106	303	422	78	65	34	1	155	31	364	1,229
	43	570	—	—	570	14	104	231	349	109	144	27	4	166	54	504	1,423
	44	591	—	—	591	20	904	674	1,598	182	261	44	9	244	68	808	2,997

（大垣地域広域市町村圏基礎調査資料、1972年より）

ス三・一％と減少を続けている。

この両町の人口増減は社会的増減によるもので、表(2)のように安八町の人口増加は他地域からの流入人口によるものである。三洋電機が進出した一九六九（昭和四四）年、一九七〇年の両年において二，四一九人の社会増となり、一九七〇年の安八町人口の一二％に相当する増加率である。同町の急激な人口の社会増加は、いうまでもなく町の積極的なプロジェクトによるものである。それを表すのが表(3)の両町の生産所得の推移である。第二次産業を比較すると輪之内町五年間（一九六五年から同一九六九年）の伸び率一・九倍に対し、安八町は五倍という大差である。

輪中堤を境として農業的土地利用の田園風景の輪之内町の福束輪中、かたや都市的土地利用の工場風景の安八町の森部輪中の対照的な景観を形成した。この景観変化が輪中民の水意識に影響をもたらすのは必然である。

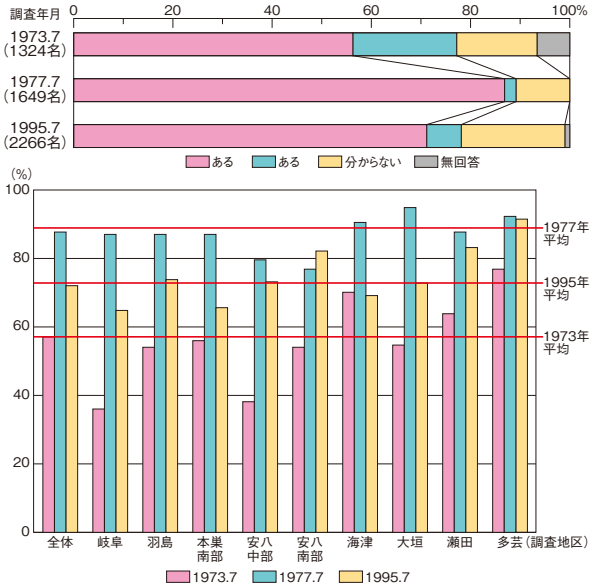
それを傍証するのが表(4)のアンケート調査である。一九七三（昭和四八）年の「今後も水害の危険性はあると思いますか」の項目では、安八町は「ある」と回答したのは輪中地域のなかで最も低く、三八・二％の回答を得ている。また、「水害の時に水防活動に出て下さいと要請があったらどうなさいますか」の項目では、「仕事を休んで参加する」と回答したのは安八中部が最低の五二・一％なのに対して、輪之内町の安八南部は最多の八一・五％の人々が「仕事を休んで参加する」としている。

この両者の水防意識―防災意識―の格差には、職業別人口構成が大きく影響していると思われる。しかし災害後の座談会で、地域住民が「新しく輪中地域に来た人々と、輪中のなかで生まれ育った人の間に精神的に大きな隔たりがある」と告白しており、水防共同体のなかで水防意識の隔たりのある人々が共存することに大きな問題があったと思われる。

このことからも、水防法第七条の「居住者等の水防義務」を行政側は新輪中民にガイダンスすべきである。

■水害危険意識についてのアンケート結果［表(4)］

問）「あなたは今後も水害の危険性があると思いますか」に対する回答割合（上）と、「あると思う」と答えた人の地区別割合（下）



※輪中研究グループ調査資料（安八中部は森部、墨俣輪中など。安八南部は福束輪中。）

また、行政側にも水防体制に不備があり、水防出動により水防倉庫を開けたところ、資材が盗難により不足していたといわれる。その他に切所池である丸池の存在、さらに揖斐川以東水防組合の組織など、九・一二豪雨災害以前には国側、地方側にも様々な改正すべき問題点があったのも事実である。

五．小輪中に進出した住宅団地の問題点 ―新旧輪中民の事例―

(A) 牛牧輪中と牛牧団地

牛牧輪中（現・瑞穂市牛牧）は犀川と五六川の小河川の河間に形成された一村一輪中の小輪中である。この輪中は両小河川が長良川に流入するため、その背水をうけて内水氾濫の常襲地であった。また遅くまで堀田が残されており、その小字も足洗と称される低湿地であった。その湿田に人工盛土して一九六八（昭和四三）年に四二〇戸の団地が形成された。この新築まもない住宅団地も九・一二豪雨（一九七六（昭和五一）年）により四二〇戸すべてが床上浸水した。その翌年のアンケート調査「今後、新築あるいは改築の際には〈水屋〉のような水害時に安全な建物をつくりたいと思いますか」では「思う」の回答がもっとも多かった。

それをうけて調査したのが図(4)である。その結果、四二〇戸のうち二階をもたない一六二戸において四七戸が二階建てに増築している。また調査時の一九七七（昭和五二）年七月の時点では一八戸が空家であった。

なお、災害時に牛牧の旧輪中民と団地の新輪中民が同一場所に避難した。その際に、団地の人々は行政側に救荒食品などの支給を強く要求し

たのに対し、旧輪中民は水害時の輪中民の心構えの必要を訴えて対立したといわれる。

(B) 太田輪中(海津市南濃町)とさくらヶ丘団地

岐阜県西南端にあるこの輪中は、東に揖斐川下流の右岸堤、西に養老断層山地の扇状地末端に形成された小輪中である。西は扇端部の伏流水の出水による氾濫を山除堤で、東は揖斐川の氾濫を輪中堤で防禦している。とくに揖斐川は南で長良川と合流しており、その背水をうけ破堤入水をうけた。右岸三・五kmの輪中域に九箇所の切所池の押堀が古地図から見られるのがその証左である。田舟型堀田によるこの低湿地も、一九六六(昭和四一)年の輪中干拓土地改良事業完工により、景観は一変した(写真(1)(2)参照)。住宅団地の開発は一九六九(昭和四四)年の「さくらヶ丘団地」二二四戸の造成が最初である。このエリアは、近鉄養老線(現養老鉄道)の沿線にあり、美濃松山駅から桑名経由で名古屋まで所要時間約四〇分から五〇分の通勤圏にある。この利便性が団地開発の立地要因となった。

近年は木曽三川の油島大橋、長良川大橋、立田大橋の架橋により、東名阪自動車道、名古屋高速と結びつく新しい交通体系が確立され、更に利便性が高まった。

(写真1) 現在の太田輪中と住宅団地(2011年)
Y～揖斐川 Z～養老山地 A～長除川 B～山除川

(写真2) 土地改良前の太田輪中(1950年)
―堀田の高畝作り 河合孝撮影―

図(3) 9.12災害以降2階建に増改築した家屋
―岐阜県瑞穂市、牛牧団地―
(昭和52年7月輪中研究グループ調査)

■太田輪中の新旧輪住民の輪中用語と意識比較[表(5)]

①あなたは「輪中」ということばを知っていますか? → 知っている
②あなたはのお住まいが「輪中」のなかにあることを知っていますか? → 知っている

	調査年月	調査人員	① 実数(割合)	② 実数(割合)
新輪中民	1973.7	40	30(75.0)	15(37.5)
	1977.7	82	62(75.6)	20(24.4)
旧輪中民	1973.7	40	39(97.5)	39(97.5)
	1977.7	56	55(98.2)	40(71.4)
高須輪中	1973.7	424	387(91.3)	387(91.3)
	1977.7	409	401(98.0)	399(97.6)
輪中全域	1973.7	1,324	1,194(90.2)	1,076(81.2)
	1977.7	1,649	1,567(95.0)	1,344(91.5)

注)新輪中民=さくら丘団地　新輪中民=太田輪中田鶴地区　(伊藤安男 調査)

次いで昭和四八年には一六一戸の松山団地の造成が開始され、昭和四九年から五四年にかけて四八三戸の松山グリーンハイツ、昭和五四年には八九戸の山崎さくら丘団地が分譲された。小さな太田輪中に九五七戸の住宅団地が立地したことは、単に景観が変化しただけでなく、水防共同体である輪中に大きな変容をきたすこととなった。その第一は人口構成の逆転である。太田輪中の人口は旧輪中民が田鶴地区を中心に約一,一〇〇人(昭和四六年)であったのに対して、主として名古屋から転入した新輪中民は約四,五〇〇人となった。

近現代になり輪中が近代化されたとはいえ、輪中が水防共同体であることは不変である。そのなかで人口構成が逆転して旧輪中民と新輪中民の比率が一:五となり、新輪中民を多数とする共同体が形成される例は見られなかった。その上、表(5)に見られるように新輪中民の大半は自分の住宅が輪中のなかにあることを知らない。

また、田鶴地区の古くからの輪中民との協調もない。例えば太田輪中の氏神は田鶴にあるが、団地の新輪中民は新しく神社を創り、同じ祭日に別々に祭礼を催している。

筆者がこの調査に着目したのは、冬季に田鶴排水機に通ずる排水路が満水であったことが端緒である。さくらヶ丘団地の生活排水が農業排水路に流入していたのである。つまり当初、旧輪中民の組織が団地の新輪中民の排水を負担していたこととなる。この農業的水利と都市的水利の競合は、住宅供給会社と輪中水利組合との協議により、その後解決したときいている。

あとがき

輪中地域は世界でも類をみない特異な地域である。それは水との闘いのなかに形成された水防共同体である。

これらはたんに景観上の囲堤集落ではなく、その社会構造において水防によって結束したある意味でもムラ社会であった。この共同体は伝統的に治水と水防を共生させてきた。

しかし、治水事業の変革とともに運命共同体社会構造は、近年になり大きく変容しつつある。

近年想定外の事象が続出している今日、この小論が水防という自助精神の覚醒となれば幸いである。

■引用文献・註

①伊藤安男
「流域環境の変遷とその住民対応」『地球環境史を考える』
名古屋大学附属図書館研究開発室
二〇〇六年
②伊藤安男
「輪中地域と防災意識」地域経済第2集
岐阜経済大学 一九八〇年
③伊藤安男
「輪中の新興住宅―新旧輪中民の水意識」
日本地理学会予稿集5 一九七三年

研究資料

木曽三川下流地域の牛頭天王信仰

服部 一宏

服部 一宏 氏

1973年生まれ
立命館大学文学部史学科卒業

現在
弥富市教育委員会生涯学習課勤務
弥富市歴史民俗資料館学芸員

一・はじめに

京都市の八坂神社で行われる祇園祭や愛知県津島市を中心に行われる尾張津島天王祭はともにスサノオノミコトを祭神とした神社の祭礼である。スサノオノミコトはかつて牛頭天王として防疫にご利益がある神として祀られてきたが、明治政府により発布された神仏分離令により仏教的な名称である牛頭天王からスサノオノミコトと名称を替えることとなった。

元々は牛頭天王自体が疫病の神であったが、厄病を眷属としてコントロールすることから、防疫にご利益があるとされ、織豊期から江戸期に全国的な広がりをみせた。昭和五三年四月に行われた津島神社の全国分霊社の調査では、愛知県に三〇四社、岐阜県に二五四社、三重県に一八社あるとされている。三重県は東海三県の他の二県と比較すると極端に少ないが、明治三九年の神社合祀令が徹底された県であり、この時に複数あった分霊社が一つにされている可能性がある。これは他県にも当てはまり、実際には更に多くの牛頭天王社が存在していたといえる。少なくとも調査当時に確認されたものだけで、東海三県に五七六社もの分霊社が存在していた。

一般的に西日本は京都の八坂神社を中心とした祇園信仰で、東日本では津島神社を中心とする天王信仰であるとされる。しかし、津島御師の檀那場には近江・山城・丹波・但馬・

● 木曽川下流域の牛頭天王信仰

地域	自治体	神社名(地区)	祭礼の名称	神葭	車楽	提灯	茅の輪	津島御札	備　考
愛知県海部津島地域	津島市	津島神社	尾張津島天王祭	●	●	●			7月第四土曜と翌日曜日を中心に実施。
		(塩田)	オミヨシサン	●				●	8月第一土曜と翌日曜日を中心に実施。
		(川北)	オミヨシサン	●				●	7月15日に実施。
		(江西)						▲(御幣)	7月第二日曜日に実施。
		(西赤目)	オミヨシサン	●				●	
		(東赤目)	オミヨシサン	●				●	
		(立石)	子供ザイレン	●				●	
	愛西市	(下大牧)	子供ザイレン	●				●	
		(上東川)	御葭祭り					●	
		諸桑神社(諸桑)	天王さん迎え			●		●	
		(草平)	ムギバツ			●		▲	
		(見越)	ミヨシ祭り			●		▲	
		(南河田)	ミヨシ祭り					▲(御幣)	
		(小茂井)	オミヨシ祭り	●		●		▲(御幣)	鵜戸川に放流した。
		(山路)	オミヨシ祭り	●		●			真菰でオミッコシサンを作って祀った。
	あま市	(二つ寺)	天王祭			●		●	集落の境界には注連縄を張り疫病などの侵入を防ぐ。
		(東溝口)	天王祭					▲(御幣)	小祠の前に青竹をさして御幣をつけた注連縄とコイと呼ぶ藁の飾り物を掲げる。
		(中橋)	天王祭					▲	
		(蜂須賀)	天王祭					●	集落の入口に御幣をつけた青竹をさす。
	弥富市	津島神社(六條)	天王祭	(●)	(●)	(●)			明治頃に経済的な理由で廃止された。
		神明社(又八)	子供ザイレン	●		●		▲(御幣)	
	大治町	白山社(三本木)	天王祭			●		●	
		馬島社(馬島)	天王祭			●		●	
		八剱社(西条)	天王祭					●	
	蟹江町	富吉建速神社(須成)	須成祭	●	●	●			8月第一土曜と翌日曜日に実施。
三重県北勢地方	四日市市	椿岸神社(桜)	天王さん			●			7月中旬に実施。湯立てを行い、湯の花を飲むと夏病みしない。別名「うどん祭」と呼ばれる。
		(鵜町)	提灯祭			●			7月13日に実施した。
		(常磐)	天王祭			●			
		(神前)	天王祭			●			
		(三重)	天王祭			●			
		(市内各所)	天王祭			●			
		(羽津)	天王祭				●		
		(中部)					●		
		大宮神明社(日永)					●		
		(塩浜)					●		
		殖栗神社(西村町)					●		
		鳥出神社(富田)					●		
		志氏神社(大宮)					●		
		海蔵神社(東阿倉川)					●		
	楠町	楠村神社(本郷)	本郷天王祭						8月14日に実施。当初は天王祭りで行われていた湯の花神事が、現在では3月第3土日、10月体育の日に行われている。
	菰野町	廣幡神社(菰野)	天王祭						2日かけて奥宮へ石を上げる神事を行う。
	桑名市	八重垣神社(大福)	夏越の祓				●		7月30日に実施。
	大安町	(南金井)	天王祭						7月25日に実施。石取車・御輿を用いる。
	鈴鹿市	(市内各所)	天王祭						7月14日に実施。かんこ踊りを奉納する。
		福楽寺(稲生塩屋)	天王祭						7月14日に実施。火渡り大護摩を行う。
		神明社(広瀬町)	天王祭						7月下旬に実施。かんこ踊りを行う。
		各神社	夏越の祓				●		6月30日に実施。
		(長太旭町)	天王祭						8月1日に実施。山車・獅子舞を奉納する。
		久留真神社(白子町)	天王祭						7月14日に実施。粳米の粉を油で揚げた「油団子」を供えた。神事後に参詣者に授与する。
岐阜県西濃地方	大垣市	津島神社(墨俣)	すのまた天王祭			●			7月下旬に実施。作り物を飾る。
		八幡神社	夏越の祓				●		茅の輪くぐりは神主が「蘇民将来、蘇民将来、蘇民将来」と唱えながら行う。
		常葉神社	夏越の祓						人形を放流する。
		屋根神津島社(船町)						●	
	海津市	津島神社(高須字米野)						●	津島講があり、御札を戸口に貼った。
		(帆引新田)		●				●	6月14・15日に実施した。
		(高須)	津島祭						おこわを炊き御神酒をあげる。
		八幡神社(長久保)	牛頭天王まつり			●			つきもの(五重の竹の輪に提灯120個をつける)を、寺から神社まで練り込んだ。
	安八町	白髭神社(中)							かつては天王祭を行っていた。
	池田町	東野神社(温知)		(●)	(●)	(●)			かつては津島神社に倣った川祭を行っていた。
	大野町		夏越の祓				●		茅の輪くぐりを行う。
	関ヶ原町	津島神社(門前町)							7月15日に実施。
	垂井町	八重垣神社	垂井曳山まつり		●				5月2～4日に実施。曳山の舞台で子供が演劇(昔は能狂言)を演じる。八坂神社より勧請された。
		南宮大社	夏越の祓				●		6月30日に実施。

尾張津島天王祭 神葭刈場選定神事

尾張津島天王祭 三番鉾

播磨など、京都に隣接していたり、京都よりも西に位置する地域も含まれている。逆に、津島神社よりも東の地域であるにもかかわらず、京都の八坂神社との関係を感じさせる祇園神社や八坂社を名乗る神社も見受けられる。合祀の際に神社名をより華やかな印象がある八坂神社に変えた地域もあり、現在の神社名だけでどちらの信仰圏であったかを判断することはできない。由緒などから合祀前の状況について調査・検討する必要があるだろう。

二．牛頭天王と「蘇民将来」伝説

牛頭天王信仰には「備後国風土記逸文」（『釈日本紀』）の「蘇民将来」伝説が大きく関わっている。

簡単に紹介すると、北の海に住んでいた「武塔神」が南海の神の娘に求婚するための道中で宿を求めることになった。その地には兄の蘇民将来と弟の巨端将来が住んでいた。金持ちの弟の巨端が宿泊を許さなかったのに対し、貧乏な兄の蘇民は貧しいながらも粟柄を神座にして粟の飯でもてなした。結婚し八人の御子をもうけ、御子と共に蘇民の下に戻ってきた武塔神は、巨端の下に蘇民の子孫がいるかを尋ねた。蘇民が娘がいることを告げると、武塔神は娘に茅の輪を腰につけるように言った。その夜、武塔神は巨端の家に攻め入ったのだが、茅の輪を身につけていた蘇民の娘だけが生き残った。そのとき武塔神は「吾は速須佐雄の神なり。後の世に病気ならば、汝、蘇民将来の子孫と云うて、茅の輪を持ちて腰に着けたる人は免れなむ」と言った。

ここにスサノオノミコトと武塔神の習合がみられる。

また、『伊呂波字類抄』には「天竺北方の九相国に吉祥園があり、牛頭天王はその城の王で武塔天神とも云う。」とあり、武塔神と牛頭天王はここで繋がる。

これらの伝説から、牛頭天王はスサノオノミコトと同一で、厄災や病気をコントロールする存在であること、茅の輪がこれらの防除に効果があるということになる。天王祭と称してないが夏の大祓いとして茅の輪くぐりをしたり、茅や人形などに厄を移しそれを水に流したりする地域は数多く現存しており、牛頭天王信仰が広範囲に伝播したことを感じさせる。

三．尾張津島天王祭

牛頭天王信仰の本社の津島神社で行われる祭礼行事は、津島神社が神葭神事を行い、市江車が朝祭、津島五車が宵祭と朝祭を担う。一般的には華やかに巻藁舟や花火などで演出される宵祭が有名であるが、この祭で根幹となるのは、本祭である朝祭と津島神社が行う神葭神事といえる。

朝祭は、市江車と津島五車の合計六艘の車楽船が行事を担う。神輿還御の準備ができると津島神社からお迎えが来て、市江車を先頭にして楽を奏しながら出船する。中の島付近まで進むと市江車に乗船していた鉾持ちが川へ飛び込み泳いで上陸する。そして、三番鉾が楼門前の石橋に張られた注連縄を切って拝殿前へ進む。これにより御旅所から神輿が還御することが可能になる。

神葭は厄病の依り代として一年間神社の本殿に納められるもので、六月一日の神葭刈場選定神事に始まり、朝祭後の深夜に行われる神葭流しで古い神葭を流して終る。放流された神葭は天王川が締め切られるまでは下流部や伊勢湾沿岸へ流れていき、漂着先では神として歓迎された。弥富市指定文化財である「おみよし松」には、神葭の漂着を記念して植樹されたという伝承が残っている。現在の天王川は築き留められて池となったため、放流の翌日に神葭が漂着したとして着岸祭が行われ、七五日間祀られる。これについては、本来の祭礼行事とは切り離して、別個に考えるべきものといえる。

四．愛知県海部津島地域の牛頭天王信仰

蟹江町の富吉建速神社で行われる須成祭は、尾張津島天王祭に似た船祭りが行われ、宵祭には巻藁舟、朝祭には車楽船が出船する。そして、朝祭の翌日の朝に神社横の蟹江川へ御葭流しを行う。津島とは異なり御葭刈りから宵祭、朝祭、御葭流しまで地区の人々によって行われる。過去の御葭流しは実際に川下へ流されたが、現在はその場所に係留されて七日後に引上げられる。引き上げられた御葭は神社の境内に設置された棚の上に七五日間祀られる。

このような巻藁舟を川や池に浮かべて行う祭礼は、かつては弥富市六條町の津島神社でも行われていた。また、当地域以外にも、洲崎天王と呼ばれた名古屋市中区の洲崎神社、熱田区の熱田神宮南新宮社などでも行われていた。

また、これら以外にも民間信仰として天王信仰はあった。愛西市の旧立田町や旧八開村には「オミヨシサン」などと呼ばれる行事がある。八開村の川北では堤防上に竹と真菰で棚を作り、そこへ津島神社で受けてきた御札を二ヶ月間祀る。祭が終ると天王送りと称して分解した棚と御札を川へ流す。これに類似した祭は「オタチクサン」として知多半島でも見られる。仮の祠を設けて津島神

社の御札を祀るのは同じだが、常滑市西ノ口町や日間賀島では、神葭に御札をくくりつけたものを海に浮かべて、津島神社から神葭が漂着したことを演出して祭を行っている。こうした信仰は津島神社の神葭流し後に行われることが多く、津島神社での祭礼を強く意識したものだった。

また、津島神社の神葭流しは見てはならない秘祭とされ、上流では厄病の依り代として忌むべき存在の神葭だが、下流部では逆に歓迎されて祀られる存在に転化している。下流部では厄病を掌りコントロールする神として積極的に迎えられている。

現存する大規模な祭礼は蟹江町の須成祭だけだが、津島神社の御札を仮祠に一定期間祀るオミヨシサンや子供ザイレンは各地で確認されており、海部地域で牛頭天王が広く信仰されていたことがわかる。

須成祭朝祭

大原祇園祭 花奪い

五. 三重県北勢地方の牛頭天王信仰

北勢地方では、現在では大規模な祭礼は行われていない。

四日市市の椿岸神社では湯立てを行い、子供たちが提灯の奉納を行う。市内には、天王祭をあんどん祭と呼んで提灯を飾る地区や、茅の輪くぐりを行う地区も多い。

鈴鹿市では茅の輪くぐりとともにかんこ踊りを行う地域もある。かんこ踊りとは、若者が頭に鳥の毛の「カブト」をつけ、襦袢や股引を身につけ、鞨鼓と呼ばれる太鼓を首からさげて、ほら貝や鉦、歌に合わせて踊るものである。全国的に広く分布しており、三重県下では中勢地方や伊賀地方に多く見られる。鈴鹿市はこれらの地域に隣接するため影響を受けた可能性が考えられる。

また、白子町の久留真神社はかつて福徳天王社と呼ばれ、七月一四日に天王祭を行う。祭では、粳米の粉を大豆の大きさにして油で揚げた油団子を奉納し、祭の終了後に参詣者へ授与する。これは津島神社の門前で売られている「あかだ」に似ており興味深い。

六. 岐阜県西濃地方の牛頭天王信仰

西濃地方には津島神社を祀る神社が数多くあり、前顕の調査で判明した分霊社二五四社のうち、一〇七社が津島神社を名乗っている。

大垣市（旧墨俣町）にある津島神社のすのまた天王祭は毎年七月下旬に行われる。「お天王さん」の愛称で親しまれ、現在でも作り物を出したり、提灯を飾って祭礼を行う。

海津市では、帆引新田が村の境界に注連縄を張って津島神社の御札を仮の祠に祀っていた。詳細は不明だが、海部津島地域のオミヨシサンと同じような内容だったと思われる。また、長久保では五重の竹の輪に提灯を一二〇個つけた「つきもの」を作って寺から神社まで練り込んだ。

この地方では、過去に天王祭を行っていたり、津島神社の御札を戸口に飾る風習など、信仰は確認できるのだが、大規模な祭礼行事はあまり確認できない。

七. さいごに

木曽三川下流域の牛頭天王信仰をみると、神葭や茅、津島神社の御札が大きな意味を持っていた。しかし、この地方を離れると必ずしもこれらにとらわれず、様々な形態で行事が行われている。

例えば、かつて津島御師の檀那場だった伊賀や甲賀地域では、本社の祭礼形態は伝わっていたし、御札も配札されていたと考えられる。しかし、これらの地域では花奪いや団扇取りなどと呼ばれる行事が行われている。地区や個人から奉納された花蓋や花傘、団扇を奪い合い、奪った花に防疫などのご利益があるとされる。もともと、集落内の厄を花蓋に集め、村の境界で花蓋を破壊や焼却することから始まった。境界に接する隣村は、持ち込まれた厄をさらに先の村へ送るために、同様の祭礼を行う必要があり、近世後期の阿山郡では祭礼を単独で行ってはならないとの取り決めがされ、祭礼が終了すると次の村へ伝達されて次々と祭礼が執行された。

このように、これらの地域で厄が村から村へと送られていくのは、津島神社から放流された神葭が下流の村々で祀られたのと似ている。また、神葭が歓迎されたのと同様に、破壊された花蓋には防疫のご利益が求められた。つまり、神葭の役割を花蓋が担っているのである。

牛頭天王信仰は、津島御師が檀那場を訪れて御札を配ることによって信仰範囲を広げていった。しかし、祭礼については本社の形態を必ずしも模倣するわけではなく、その土地にある風習や文化を取り込んでいった。そのため、祭礼のバリエーションは増え、牛頭天王信仰を複雑なものとしているように考えられる。今後も津島御師が檀那場とした地域の祭礼形態について、地域の歴史や特性と絡めながら調査していく必要があるだろう。

孫太郎狐と尾白狐

昔、馬串山に孫太郎という雄狐が住んでおり、米田山には尻尾の白い雌狐が住んでいました。この二匹の狐は大変仲が良く、いつも一緒に山を駆け回っていて、狐仲間でも評判の間柄でした。

ところが孫太郎は、福島村の飛騨川左岸にある大きな岩に祀られた弁財天の美しさに心を移してしまい、日夜この岩に現れるようになりました。この様子を見た尾白の狐は心穏やかではいられません。

怒った尾白狐は、やつあたりで人を化かしたり、人に乗り移ったりして、村人を困らせるようになりました。

この話を聞いた弁財天は二匹の狐を呼んで、もとの仲に戻るようにやさしく言い聞かせました。弁財天に諭された二匹は、再び仲良く山野を駆け回って遊ぶようになり、尾白狐のいたずらもなくなりました。

弁財天が祀られていた大きな岩は、現在は川辺ダムの築造によって湖の底に沈んでいます。

木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,500点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。

船頭平閘門
木曽川文庫

《開館時間》
午前8時30分～午後4時30分

《休 館 日》
毎週月・火曜日(月・火曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入 館 料》無料

《交通機関》
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

KISSOホームページ
http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html

木曽川文庫へのお問い合わせは
〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166
Mail kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp

Johannis de Rijke の日本語表示については、かつては「ヨハネス・デ・レーケ」と呼ばれていましたが、「KISSO」では、現在多く使われている「ヨハニス・デ・レイケ」と表記しています。

編集後記

歴史記録は、第83号から連載し、「輪中の水防意識」の第二編を掲載しました。研究資料には、服部氏に「木曽三川下流地域の牛頭天王信仰」について寄稿いただきました。

なお、この資料は、創刊号からの全てがKISSOホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上
「阿夫志奈神社」
国道41号上川辺交差点の南に鎮座する阿夫志奈神社は、延喜式式内社で811(弘仁2)年建立と伝わっています。春の例祭では、猿田彦の面をつけた蝿追男が獅子舞いを手なづける舞いが奉納されます。

下
「川辺ダム湖」
川辺町内で飛騨川を渡る橋のうち、最下流の山川橋から上流を望みました。飛騨川の水を満々と湛える川辺ダム湖は一年を通して穏やかな表情を見せています。青い湖面にアクセントを添える正面の赤い橋は、新山川橋です。

『KISSO』Vol.85 平成25年1月発行

編 集 木曽三川歴史文化資料編集検討会(桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか)

発 行 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所調査課
〒511-0002 三重県桑名市大字福島465
TEL(0594)24-5715 ホームページ URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/